審査結果の要旨　　氏名　郭　素秋

本論文は、彩文土器という文化要素とそれに付随する文化事象に注目し、台湾と福建・浙江南部との比較を通して、紀元前３千～２千年紀における台湾海峡を挟む両岸地域の先史文化の動態を読み取り、台湾先史文化の展開について新たな展望を切り開こうとした意欲的な研究である。

台湾海峡を挟む文化交流の解明は、戦前から今日に至るまで一貫して関心が寄せられ続けてきた研究課題であるが、両地域における資料の不足に加え、台湾の歴史的位置付けという政治的にデリケートな問題に関わることもあってその解明は遅れていた。

郭素秋氏は、台湾の研究者として種々の制約がある中で、中国本土を含む遺跡と資料の調査を行い、近年飛躍的に増加した海峡両岸地域の彩文土器に関するデータを可能な限り網羅的に集成し、中国大陸における最新の研究成果をも踏まえつつ、土器の各種属性や土器群としての構成なども検討し、資料に密着し、客観的姿勢に徹した考察を進めた。その結果、台湾における彩文土器の系譜と展開について、かつて予想されたような中国北部の仰韶文化の彩文土器の流れを引くものではないこと、至近距離の福建省の彩文土器と基本的な対応関係を保ちながら変化することを資料によって提示し、両者の関係について体系的な見通しを示すことに成功し、ひいては台湾の独自な文化変遷と大陸からの影響の交錯が織り成す両地域の文化交流のありかたを解明した本論文は、博士学位授与に見合う研究成果として高く評価されるものである。

増えたとはいえ、なお十分とは言えない発掘調査資料によって全体を組みたてようとする作業の過程にまったく無理がないわけではなく、示された土器編年にも確実な部分となお不安を感じさせる部分が混在し、土器その他の遺物の類似と相違の裏に潜む文化現象の本質に対する切り込みが不十分であること、従来の台湾考古学で中心的問題とされてきた民族の移動と形成の問題に本論文の成果をどう関連づけるかなど、今後のとりくみが必要と感じさせる部分も少なくないが、資料の現状で可能な限り問題を解明した意義は大きく、本論文に盛り込まれた学術的価値を損なうものではない。よって本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと認定する。